

復興への羅針盤

福島県立福島高等学校・2年 ^{スズタニ} ^{サトシ} 錫谷 智

雄大な自然を前にして、色々なことを思うようになったのはあの日からだと思う。

——あの日、大きな地震があった日。激しい揺れに襲われ、自宅の机の下で必死に身を丸めた。耳を塞ぎ、歯を食いしばった。それでも地響きや棚の中身が崩れ落ちる音が鼓膜を強く震わせた。自分の身に起きていることが信じられなかった。震災の様子を報道するニュースを見ていても、しばらくの間は本当に不思議な気持ちだった。そのような報道を見ている自分が、自分でないような気がした。

震災の被害は長く長く尾を引いた。特に僕の住む福島では原発事故の影響で、外出さえも思い通りにはいかなかった。震災は僕から日常をことごとく奪っていった。しかし、日常などというのは初めからなかったのかもしれない。あったとしても非常にもろくて弱々しい、薄氷のようなものなのだろう。あの日、僕はそれを教わった。

震災から十年経って被災地の多くは元の姿を取り戻しつつある。福島市では震災前にはなかったビルも多く立ち、僕の高校の校舎も震災後に建て直したものだ。沿岸部でも更地が目立つものの、新しい建物がちらほらと見られる。しかし、これを見ても僕はあまり復興を感じない。見た目は復興したとしても、肝心なのはそこに住む人々やその生活が復興しているかどうかである。仕事は戻ったのか、町に活気はあるのか、人々は今の暮らしに満足しているか。景色だけ復興しても無意味であり、復興の本質は物質的、外面的なものではなくむしろ内面的なものだと思う。僕は復興を、人々が生きがいを持って現在の暮らしを謳歌できている状態と捉えている。

では内側から町を元気づけるにはどうすればよいのか。僕は産業の活性化を考えた。産業が活発になれば、そこに人が集い、快活なコミュニティが形成される。これは復興の一つの形であり、一つのゴールだろう。その達成のために、その土地の強みを最大限に

活用するのは重要なことだ。福島には風土や気候、文化などの観点において特徴的なところが数多く点在している。そしてその持ち味は全国で戦っても見劣りのしないものだと思う。県北を中心とした桃の栽培は全国屈指であるし、会津漆器は歴史的な価値を有する。ではどうすればそれらの地域産業を拡充できるのか。私は他の県や地方など外の地域へのアピールが有効だと考える。もちろん、この活動が宣伝としての効力を持つのは言うまでもない。産業や商品の認知度を上げ、風評被害の払拭にも役に立つだろう。それに加えて、私はピーアール活動にもう一つのメリットを見出した。それは小規模産業の問題の一つである地元の若者流出を防ぐことである。地元の人間を引き止めるために外部への活動をするのは矛盾するように思えるかもしれない。しかし、アピールという外向的な活動を行い、地元産業が評価されたならば、若者は自分の故郷の産業に新たな魅力を見つけることができる。長年その地域で育ち、産業を見つめてきたとしても気づけないものもある。それが外からの視線である。自分の地域の産業は全国に通用する高度なものであると分かれば地域の産業に誇りを持つようになるだろう。自分もその歴史を繋ぎたいと奮い立つ若者も少なくないはずである。これは若手獲得に直接的に結びつく。

このように、外向きの活動を進めることで全国に誇れる福島の諸産業の価値を高めると共に地元にもその価値を改めて周知させることができる。これは若手流出の防止に繋がり、地域産業の活発化に大きく貢献する。活発な産業、それに伴う明るいコミュニティの形成は復興の一つの答えである。

人々が自信と誇りを持って笑顔で働き、暮らす福島、そんな福島をぜひ再びこの目で見てみたい。その日は遠くないと確信している。

——その日、福島が真の復興を成し遂げ、生まれ変わる日。